天神崎（田辺市）における海岸林の保全活動

和歌山県立田辺高等学校　土永　知子

1. はじめに

田辺市には、日本で最初のナショナルトラストの地となった天神崎、南方熊楠がよく訪れたひき岩群、紀州備長炭の原木ウバメガシが多く生育する奇絶峡などがある。いずれも田辺高校から約2～3kmの距離にあり、生徒は小学校の頃の遠足地として親しみを持っている。

県立自然公園である天神崎の陸地側には、「魚付き林」としての照葉樹林がある。近年モウソウチクが繁殖し、問題となってきた。そこで(財)天神崎の自然を大切にする会では、樹林を維持させるために、県の許可をとり、竹を一部伐採した。

その時に伐採した竹材を譲り受け、田辺高校生物部では竹炭を作り、利用した。

また、田辺高校自然科学科では、クラスの取り組みとして製炭をフィールドワーク学習に取り入れ、竹材を用いて文化祭での展示発表を行った。

2. 実践内容

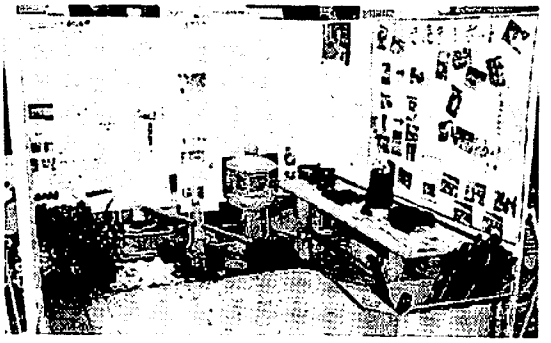
生物部は、1999年5月より天神崎の植生に関する調査を始めた。20年前の植生図と比較すると、明らかにモウソウチク、ハチクなどの竹林やササ原の拡大が確認できた。

8月30日に竹伐採のボランテイア活動があり、生物部も参加した。その際の大量の竹材を炭にするため、紀州備長炭記念公園の炭窯を借り、9月11日に窯入れを体験した。生物部では、できた竹炭を用いて、中庭の池の浄化に関する実験に取り組んだ。

また本校自然科学科では、フィールドワークとして、「田辺市の自然環境についての学習」を行った。9月18日、ひき岩群ふるさと自然公園センターで、田辺市の自然環境に関する講演を聞いた。その後紀州備長炭公園で竹炭の窯出しを体験し、備長炭の原木を効率的に再生産する古来の知恵について学習した。さらに、公園内のビオトープでは、生き物と触れ合う体験をした。

9月27・28日に行われた文化祭で、自然科学科のクラスでの取り組みとして、天神崎で伐採した竹を用いて竹垣、縁台、実際に水を循環させて鹿おどしが鳴る添水などを作り、石や植物なども添えて教室内に日本庭園を作り出した。当日は、竹炭を用いてお茶をいれ、訪問客の接待を行った。

10月30・31日には、「竹材と竹炭に関する展示発表」を県産業教育フェアで行った（写真）。



2000年2月4日に行われた校内フィールドワーク発表会では、「紀州備長炭と田辺市の自然環境」に関する体験発表を行った。

3. おわりに

田辺市の自然は、梅畑などの農耕地の拡大や自然林の減少によって荒廃してきたといわれるが、まだまだ恵まれたものであると言える。

しかし、大部分の高校生はたいして関心がなく、日々時間に追われて生活しているのが現状である。

「天神崎の自然を大切にする会」の活動がきっかけとなって、本校自然科学科1年生40名と生物部の生徒達が、貴重な体験をすることが出来た。特に、鋸や鉈などの工具を扱ったことがなかった生徒達には強く印象が残り、図面書きから製作まで、自分達で作り上げた日本庭園は十分な満足感を味わったようである。ビオトープでの生き物との触れ合いや竹炭作りなどの体験学習は、多くの生徒がアンケートに「心に残った」と記していた。

天神崎では、竹の伐採後、照葉樹の実生の成長が確認できた。今後も恵まれた環境を活かし、環境教育に取り組んでいきたいと考えている。

なお、生物部の「天神崎（田辺市）のタケの繁殖と竹炭による浄化実験」は第43回日本学生科学賞で県最優秀賞を受賞、中央展に出品した。